

「京都を学ぶセミナー洛西編」第4回（開催報告）

2020年9月8日
京都学・歴彩館
075-723-4835

2018年度から開始した「洛西の文化資源」研究プロジェクトの成果を分かりやすく解説する「京都を学ぶセミナー【洛西編】」第4回を、下記のとおり開催しましたので報告します。

記

- 日 時 2020年9月8日（火）13:30~15:00
- 会 場 京都学・歴彩館大ホール
- 参加者数 138名
- 内 容 講演 京都外国語大学准教授 村山 弘太郎
「御紋付道具拝領の意味 ―江戸時代の清凉寺―」

■ セミナーの様子と当日の参加者の声

第4回セミナーでは、江戸時代の清凉寺を素材に、御紋付道具について講演があった。江戸時代でも菊御紋の使用状況は管理されていた。しかし、他者との差別化、権威の付加のために多大の労力を要しても菊御紋の拝領が望まれた。そのため、菊御紋付の道具は天皇、皇室、朝廷と親密な関係にない社寺でも多く見られる。

江戸時代の清凉寺では大覚寺・真言子院と本願・浄土子院の間でイニシアティブ争いが繰り返されていた。大覚寺と真言子院は「寺務」としての大覚寺とその下でフラットな関係を築く真言子院と、その下で雑務に携わる本願と浄土子院という認識であったが、本願は自身が清凉寺を代表する存在であると認識していた。本願は防衛策として対外的な文書に「清凉寺」や「方丈」と署名することで既成事実を積み重ね、住持相続などのたびに奉行所や幕府に対して御目見を繰り返すことなどによって、権力との結びつきを強化しようとした。この文脈上に、御紋付道具拝領も位置付けることができる。すなわち、江戸時代には寺院内部での代表者争いにおいて、本願や浄土子院が自己の権威化を希求した結果、御紋付道具を拝領したのであった。

「寺社見学の時、その背景を考える上で、興味を深くもてるようになりました」、「日頃神社仏閣で見る御紋についての疑問が少し解けました」など参加者から好評を博した。

